
第13章 聖化

13.1. 有効な召命によって新しく生まれ、新生された者は、自分のうちに新しい心を持つようになり、新しい霊によって創造された者は、キリストの死と復活の功勞を通して（Iコリント6:11、使徒20:32、ピリピ3:10、ロマ6:5,6）、その御言葉と彼らのうちに内住する御霊によって（ヨハネ17:17、エペソ5:26、IIテサロニケ2:13）実際に、そして人間的にさらに聖とされます。体全体を主管していた罪の權威は破壊され（ロマ6:6,14）罪の体から出て来るあらゆる情欲は弱まり、抑制され（ガラテヤ5:24、ロマ8:13）、彼らはすべてにおいて、救いの恵みの中でさらに活気と力を得るようになり（コロサイ1:11、エペソ3:16-19）真に聖なる生活に向かって進むのです。このような聖がなければ、だれも主を見ることはできません。（IIコリント7:1、ヘブル12:14）。

義認を説明する11章1項と同じく、聖化を説明する上でも有効な召命によってと始めています。キリストとの結合教理の中で聖化を説明しているのです。そして有効な召命の中で、聖なる性質が植えられ、性向が形成されてこそ聖化が可能だから、有効召命を言及しました。有効に召命される効果が新生であり、新生とは、新しい心と新しい霊によって創造されることで、聖霊さまが心の中

に新しい霊的本性を植えられるのです。

そして回心以降に、聖霊さまが植えておいた霊的原理を培養させ、発展させるのが聖化です。従って新生と聖化は、聖霊の御業の側面を見たとき不可分の関係です。聖化は、救いの恵みの中で強化されることを意味します。聖化は、実際的なものとして、その効果を目で確認して見ることができます。聖化は、罪を殺すのと、救いの恵みの中で霊的生動感があふれるものとして構成されています。聖化は、救いの部分として聖化がなければ救いはありません。

従って、聖化を通して義認の有無を確認するのです。つまり、聖化がなければ、義認は起こっていないのです。主は、その実によって木を確認なさると語られたことと同じ原理です。清教徒たちは義認と聖化を、キリストとの結合の二重的恩恵だと述べました。義認と聖化は、本質は異なります。義認とは関係の上の変化、あるいは、身分の変化を指していて、聖化は実質的な変化を指します。義認と聖化は、時間上の順序ではないけれど、本質上、義認が聖化より先立ちます。実際に、聖さが表れるためには義の転嫁が先行されるべきです。従って義認は、キリストの義が転嫁されることですが、聖化は、内面的に義が成し遂げられることです。義認は、罪人を義人と宣言する法廷的な行為に該当されるが、聖化は、靈魂の品性の中で実質的な変化を起こす道徳的で物理的な行為に該当されます。義認は直ちに完成され、すべての信者に程度の差がなく適用されますが、聖化は、始めは不完全のようだけど、信者個人に応じて成就される程度が、みな異なります。

結局、1項の説明からは、聖化がなくても、義認だけでも救われると主張する道徳律廃棄論主義が誤りだというのが明白になります。誤りの中で誤りです。道徳律廃棄論主義は、聖書では、その実によってその木を知るというキリスト

の命題を、根によってその木を知るというのに変えました。誤りの中で誤りです。一方、クエーカー主義者たちは、義とされたなら完全に聖なる者とされた」と主張しますが、これもやはり誤りです。20世紀に「一度の救いは、永遠の救い」を叫びながら、聖化を無視する者たちがいますが、聖書から逸脱した主張です。

13. 2. 聖化は、人間の本性のすべての部分に影響を及ぼします（Iテサロニケ 5:23）。しかし、この世での生活では不完全です。すべての部分にある程度の腐敗が残っているので（Iヨハネ 1:10、ロマ 7:18, 23、ピリピ 3:12）そこから、継続的に和解のできない戦いが生じ、肉の願うことは聖霊に逆らい、聖霊は肉に逆らうからです（ガラテヤ 5:17、Iペテロ 2:11）。

聖化は、知性と意志と情緒に影響を及ぼすのです。つまり、知性は聖なるものによって満たされ、意志は聖なるのを喜んで追求し、情緒は聖なるものによって喜ぶようになります。それにもかかわらず、信者の聖化はこの地において不完全です。この世に生きている限り、悪魔の誘惑が続けられ、内面に腐敗性が残っているからです。従って、信者に残存する腐敗性を、聖霊によって殺さなければならないのです（ロマ 8:13）。

信者に、聖化を責任として置くのは、自分の力と能力によって聖を成し遂げられないことを認めさせ、ただ聖霊の恵みに頼らせようとする目的があります。従って聖さを求め、労苦する者たちは、さらに謙遜になり、主の恵みをつかむようになり、聖霊さまが主権的にその靈魂を聖なる者にさせるのです。

しかしペラギウス主義者たちは、神が、人間に聖くなりなさいと命じることが、人間が行為によって聖くなれるから、そのような命令をなさただと主張します。これは明白な誤りです。教皇主義者たちとソツツイーニ主義者たちと再洗礼派主義者たちは、この世での生活であっても、完全な内在的聖さを持っているとか、そのような状態に到達できるとか主張しますが、その聖さは迷信的だったり幻的なものに過ぎません。一方、ウェスリーの完全聖化理論を持って清潔運動を起こした完全主義者たちは、二回目の聖霊の体験によって完全になれると主張します。これは実際的な聖なる生活を見せるより、幻的な体験のことです。この地においての信者は、腐敗性を持っていて、世に生きていて、悪魔が相変わらず誘惑をしているから、完全に至ることはできないのです。

13.3. この残っている腐敗性が、しばらくの間は優勢だと言っても（ロマ7:23）、キリストの御霊から、聖くさせるところから続く力の供給を通して、新生されている部分が勝利し（ロマ6:14、Iヨハネ5:4、エペソ4:15,16）、それで、聖徒たちは恵みのうちに成長し（IIペテロ3:18、IIコリント3:18）、神を恐れる中で聖さを完成していきます（IIコリント7:1）。

信者の内面に、霊的な部分と肉的な部分の衝突が続けて起きます。初心者の場合、腐敗した部分が優勢することもあります。従って必ず、聖霊によって恵みの供給を受けて、霊的部分が優勢になるようにすべきです。信者は必ず恵みによって成長すべきです。また聖さを完成して行くために神を恐れることが必要ですが、罪と汚れを避けるためです。従って聖化は、その性質上、漸進的です。しかし、一気に完全に至ることができると教え、その幻体験を激励する清潔運動の完全主義は、誤りです。